フッサール他者論に関する先行研究の整理と比較検討（１）
―フッサールへの批判を中心に―

Survey of Previous Studies on Husserl's Theory of the Other (1) : Focusing on Criticisms of Husserl

佐　藤　大　介
SATO, Daisuke

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要
第52号　2021年12月　抜刷
Journal of Humanities and Social Sciences
Okayama University Vol.52 2021

フッサール他者論に関する先行研究の整理と比較検討（1）
――フッサールへの批判を中心に――

佐　藤　大　介*

はじめに

フッサールは、他者がどのように経験されるのかについて多くの思索を重ねた哲学者である。ここでの他者とは、自分と同様な意識の働きを担いながらも、自分とは数的に別の者のことだと、ひとまず理解してよい。もちろん、或るものが他者として意識をもっていると認めるとしても、その意識が直接的に捉えられているわけではない。もしこれが可能であれば、その場合その或るものは、他者ではなく、もはや私自身である。他者に対するこのような理解を出発点とすることは、他者経験を論じるにあたってさしあたり問題とはならないだろう。

フッサールは『デカルト的省察』第五省察（以下では簡潔に「第五省察」と記す）において、他者論を展開している。これは、フッサールの公刊著作において呈示された他者論としては、最もまとまったものである。そこでは、ごく簡潔に言えば、次のように論じられている（cf. Hua I, 124–128, 140–143）。私に固有な領分、すなわち原初的領分（Primordialsphäre）において、私の身体物体性（Leibkörperlichkeit）が経験される。そして、この私の身体物体と類似した物体が眼前に現れるならば、その物体も私と同様な身体物体と見做され、その眼前の物体は私と同じような意識をもっているものとして、すなわち他者として、経験される。こうした経験では、原初的領分において生じていることが、その物体へと移し入れられている。フッサールは、このように他者経験について説明しており、この説明を移入（Einfühlung）の理論と呼んでいる（cf. Hua I, 173）。

こうしたフッサールの他者論については、これまでに多くの批判と擁護が展開されてきた。その際、フッサールの生前には未発表であった草稿も、しばしば典拠として用いられている。先行研究においては、フッサールの遺した膨大な量の草稿にも目を配りつつ、様々な観点から議論が積み重ねられてきたのである。

本論の目的は、フッサール他者論に対するこれまでの主な批判を整理し、それを比較検討することである。そのために本論では、①原初的領分の解釈、②移入理論の再構成、③批判の要点、これら三点に着目して先行研究を整理する。②では特に、対象に移入されるもの、移入に関する意識の働き、移入の根拠が、それぞれどのように理解されているのかを確認する。①と②に着目すれば、各先行研究においてフッサール他者論がどのように理解されているのかを、掴むことができる。また、③での

* 岡山大学大学院社会文化科学研究科客員研究員

要点に照らせば、本論で詳しく確認するように、先行研究の主な批判は（A）〈私と同等な他者の不在〉を指摘するもの、（B）〈現実的な他者の不成立〉を指摘するもの、（C）〈分析の不徹底〉を指摘するもの、これら三つに大別できる。このような整理は、フッサール他者論に関して、先行研究の成果を概観する点でも、今後の研究をこれまでの研究の中に位置づける点でも、役に立つだろう。しかし、それを主題的に行った研究は、少なくとも国内のフッサール研究の中には見当たらない。あるとしても、比較的簡潔なものにとどまる（cf. 斎藤 [2000, 253–268]、鈴木 [2021, 1–9]）。

本論では、次の手順で考察を進める。まず、『デカルト的省察』における他者論の概略を、簡潔に確認する（第1節）。次に、（A）〈私と同等な他者の不在〉を指摘する批判として、ミヒャエル・トイニッセン『他者』（第2節）、ベルンハルト・ヴァルデンフェルス『対話の中間領域』（第3節）を整理する。次に、（B）〈現実的な他者の不成立〉を指摘する批判として、クラウス・ヘルト「相互主観性の問題と現象学的超越論哲学の理念」（第4節）、斎藤慶典『思考の臨界』（第5節）を整理する。次に、（C）〈分析の不徹底〉を指摘する批判として、榊原哲也『フッサール現象学の生成』（第6節）を整理する。トイニッセン、ヴァルデンフェルス、ヘルトの著作は、フッサール他者論に関する古典的な研究となっている。また、斎藤、榊原の著作は、それら古典的な研究を踏まえた国内の先行研究として、重要だと考えられる。これらを整理したうえで、それぞれの議論を比較検討し、分類した批判それぞれの特徴を簡潔に示す（第7節）。

なお、国内の先行研究の間では、フッサール他者論におけるいくつかの術語について訳語が異なっているが、本論では訳語を統一した。例えば、「primordial/primordinal」は「原初的」、「Vergegenwärtigung」は「準現在化」、「Einfühlung」は「移入」[1] とした。このようにする意図は、或る特定の解釈を示すところにあるのではなく、いくつかの先行研究を横断的に整理し比較検討するにあたって、これを簡明にするところにある。

第１節　『デカルト的省察』における他者論の概略

本節では、『デカルト的省察』における他者論の概略について、特定の解釈をとることなく、できる限り中立的に確認する。

『デカルト的省察』における他者論の主眼は、他者がどのようにして明証的に構成されるのかを、具体的な他者経験に関する反省的分析において理解することにある（cf. Hua I, 122, 126, 136）。フッサールは、どんなものごとも意識との連関の中で「意味（Sinn）」として現れ出ると見定めたうえで、そのようにものごとが現れ出ることを「構成（Konstitution）」と呼ぶ（cf. Hua I, 79–80）。つまり、彼によれば、意識はいつも「或るものについて」働くという志向性を具えており、如何なる対象も、そ

[1]　特に「Einfühlung」関しては、「感情移入」、「自己移入」、「感入」のように、これまでに様々な訳語があてられてきた。それぞれの訳語の特徴に関しては、浜渦 [1995, 246–247]、田口 [2010, 316] を参照。

れが〈何〉で〈どのよう〉であるというように、何かしらの「意味」において志向されている（cf. Hua I, 71–72, 85–86）。こうした意味がその対象と合致しているという正当性は、明証から汲み取られると、フッサールは見定める。フッサールにおいて明証とは、「真理の『体験』」や「直接的に『見る』こと」と表現されるように、或るものごとに関する判断を下すための権利根拠が、そのものごとについての意識体験において得られていることを指す（cf. Hua I, 51–52, 92–93; Hua III/1, 43; Hua XVIII, 193）。こうした意識体験を反省的分析によって明確にすること、これがフッサール現象学においてものごとの成り立ちを理解するための基本的な方法である。フッサールは、他者についてもそうした方法において、理解しようとするのである。

フッサールは、他者経験を説明するにあたり、原初的領分として私に固有な領分を際立たせる。そのためにフッサールは、「異他的なもの（Fremdes）」を「抽象的に遮断する」（cf. Hua I, 126）。すなわち、「人間や動物にいわば私のように生きている存在者というような特別な意味を与えるものをまずは捨象し、さらには、それ自身の意味において自我主観としての『他者』を指示しそれゆえそれを前提する、現象的世界のあらゆる規定を捨象する」（Hua I, 126–127）。フッサールによれば、このように浮き彫りにされる私固有の領分において、世界は「万人にとって経験可能なもの」という意味での客観性を失った「単なる自然」として残り、この中には単なる物体だけではなく、「私の身体」も見出される（cf. Hua I, 127–128）。フッサールは、このような領分を構成の秩序からして「原初的」であると見定め、この領分において見出される世界を「原初的世界」として、他者構成における基礎的な層に位置づけている（cf. I, 136–137, 173）。

上述を踏まえたうえでフッサールは、私の身体と類似した物体が眼前に現れた際に他者経験が成り立つと、説明する。フッサールは以下のように論じている。他者が経験されるとはいっても、その際に私の原初的領分において現れているものは、私の身体と類似した物体であり（cf. Hua I, 140）、他者の自我そのものや他者がもつ体験のような、他者に固有なものが、直接的に現れ出てはいない（cf. Hua I, 139）。そうした他者に固有なものは、私の身体と類似した物体が現れると、私との類比において間接的ないし付帯的に捉えられる（cf. Hua I, 140, 144, 148–149）。すなわち、私の身体と類似した物体の「現前化（Präsentation）」と共に、他者に固有なものの「付帯現前化（Appräsentation）」が生じる（cf. Hua I, 138–139, 143–144）。この際、眼前の対象を他者として捉える「類比的統覚（analogische Apperzeption）」が成り立つ（cf. Hua I, 138–141）。つまり、「統覚」とは、様々な把握を取り纏めて対象を〈何〉として統一的に捉えることを指し、上の類比的統覚では、現前化したものと付帯現前化したものとが共に把握され、それらが取り纏められて、眼前の対象が〈他の身体〉、〈他者〉として捉えられる。他者は、このように「自分固有のものの類似物としてのみ考えることができる」のであり、それゆえ、他者は、「現象学的には私の自己の変様として」現れる（cf. Hua I, 144）。以上のようにフッサールは、他者経験を類比的統覚として説明している。

フッサールによれば、上述の他者経験では、私の原初的領分で構成されたものごとが、眼前の対象

に移し入れられている（Hua I, 140, 148–149）。彼は、例えば、他者経験において眼前の物体が身体として捉えられていることにおいて、次のように論じている。

> この〔原初的な〕自然と世界においては、私の身体が、身体（機能している器官）として根源的に構成されており、また構成されうる、唯一の物体であるのだから、身体として捉えられているそこの物体は、この〔身体という〕意味を、私の身体からの統覚的な移し入れによってもたねばならず、しかも、それ特有の身体性という述語を現実に直接的な、それゆえ原初的な実証を、すなわち本来的な知覚による実証を、排除するような仕方においてもたねばならない。私の原初的領分の内部でそこの物体を私の物体と結び付ける類似性のみが、前者を他の身体として類比的に把握することに動機づけの基礎を与えうるということは、初めから明らかである。（Hua I, 140）

このようにフッサールは、他者経験では私の原初的な領分からの移し入れが生じていると、見定めている。そのうえでフッサールは、こうした移し入れを「対化（Paarung）」として特徴づけている（cf. Hua I, 141–142）。フッサールにおいて「対化」とは一般に、「『同一化』という受動的綜合に対立させて連合と呼ぶ、受動的綜合の一つの根源形式」である（cf. Hua I, 142）。すなわち、それは、二つのものがおのずから一つのまとまりをもって捉えられることではあるが、二つのものが同じものとして同一化されることではなく、「対象的意味を相互に重ね合わせ覆い合うこと」である（cf. Hua I, 142）。フッサールによると、こうした対化が上の移入でも成り立っており、眼前に私の身体と類似した物体が現れるならば、それも私と同様なものとして受動的に捉えられるのである。

第２節　ミヒャエル・トイニッセン『他者――現在の社会的存在論の研究』

トイニッセンは『他者』[2] の中でフッサール他者論を批判しており、この批判は、（A）〈私と同等な他者の不在〉を指摘するものに分類できる。同書の目的は、「社会的存在論」を呈示するとともに、超越論的哲学への批判に貢献することにある（cf. VIII, 6–7）。トイニッセンによれば、ここでの「社会的」という語は、「他者との前社会的関係を含む、他者とのあらゆる関係に及ぶ」ことを表わし（cf. 7）、「存在論」という語は、「今日では他者が第一哲学に入り込んでいる」ことを表わしている（cf. 6）。つまり、トイニッセンは、他者を主題に据えて、社会学を哲学的に基礎づけようとするのである。こうした基礎づけのために、トイニッセンは主に、フッサールが呈示した超越論的哲学とブーバーが呈示した対話の哲学について、検討する。というのも、トイニッセンによれば、両者の対立的な視点が、他者の主題化に関して現在示されているあらゆる可能性を、その射程に含んでいるからである（cf. 3）。こうした検討の中でトイニッセンは、フッサール他者論における「パートナーの不在」（155）を指摘

[2] 本節に限り、同書からの引用箇所および参照箇所の指示は、頁数を括弧内に示し、文中に記す。

する。つまり、フッサール他者論では他者が私と同等なものとして説明されていないと、批判するのである。

① 原初的領分の解釈

トイニッセンによると、フッサールの呈示した原初的領分とは、世界から異他的なものを抽象することで残される、「私にとって - 固有なもの」である（cf. 56）。より詳しく言えば、トイニッセンは以下のように解釈している。フッサールは、「『現象世界』でその可能性の構成条件として『他者』を指示する、すべてのものを排除する」(56)。こうした「原初的エポケー」の結果、世界は、もはや日常的な態度において経験される世界ではなく（cf. 55）、事物世界である単なる自然、原初的世界として、浮き彫りになる（cf. 57）。こうした世界では、他者の身体も、物体としてしか現れていない（cf. 59）。身体性は、原初的世界の中心的なここを占める私の身体としてのみ、経験されている（cf. 57）。このように事物や私の身体が見出される原初的世界が、フッサール他者論の出発点となっている（cf. 78）。以上のようにトイニッセンは解釈している。

② 移入理論の再構成

トイニッセンは、フッサールの移入理論を、五つの段階に分けて再構成している。簡潔に言えば、次のようになっている（cf. 78）。

（a）眼前の物体を、私固有の身体的物体との類比に基づいて、身体として統覚する
（b）心理学的に言えば、異他的な心の生の経験、超越論的に言えば、純粋な他のエゴの経験
（c）原初的世界の同一化による客観的世界の構成
（d）他者を他の人間として統覚する
（e）人間という対象統一を私自身に移し入れる

トイニッセンによれば、上の五つの段階は、第一段階が説明されると、それに基づいて残りの段階は直接的な結果としてついてくるものとなっている（cf. 58, 68）。しかし、トイニッセンは、その第一段階にすでにフッサールの誤解が含まれていると、見做している。それがフッサール他者論に対するトイニッセンの批判と深く関わることから、本項目以下では、特に第一段階とこれに直接的に関連する第二段階に着目して、整理する。

上の再構成においてトイニッセンは、対象に移入されるものを、心理学的には私固有の心的内容、超越論的には純粋な他のエゴだと理解している（cf. 68–70, 72）。前者の心的内容は、より具体的に言えば、気分や体験、性格や習慣的な行動といったものを指す。こうした心的内容を眼前の対象に移し入れることが、日常的に理解されているいわゆる移入、心理学的な移入にあたると、トイニッセンは

理解している。また、後者の他のエゴとは、それ固有の原初的領分をもったエゴを指す。トイニッセンは、これを対象に移し入れることによって対象が私と同様に世界を経験するものとして構成されると理解し、この移入を超越論的な移入と呼ぶ。トイニッセンによると、こうした超越論的な移入は、心理学的な移入に先立つ。というのも、心理学的な移入において心的な内容を対象に移し入れるためには、その対象がエゴをもつものとしてあらかじめ構成されておかねばならないからである。なお、トイニッセンは、心理学的移入と超越論的移入を併せて、先述の五つの段階における第二段階に位置づけている。なぜなら、それらの移入は、眼前の対象が身体として構成されているという第一段階を踏まえて、はじめて成り立つからである。

トイニッセンは、上述の移入に関する意識の働きとして対化に着目し、これを二つに分けて以下のように理解している。

一つは、私の身体的物体と眼前の物体との対化である（cf. 63–64）。これは、私の身体的物体と眼前の物体との類似性に動機づけられて、それらが対になって連合することであり、エゴや身体が対になって連合することではない。トイニッセンによればフッサールは、そうした物体の対化を前提として、眼前の物体が身体として類比的に統覚されると、見做している（cf. 60, 64）。つまり、眼前の物体が私の身体的物体と対になることではじめて、私の身体的物体おける身体という意味がその眼前の物体に移し入れられ、その眼前の物体も、類比的に私と同様な身体として捉えられるのである。

もう一つは、私のエゴと他のエゴとの対化である（cf. 62–63）。これは、先述の五つの段階に照らせば第二段階に属す対化、すなわち、心理学的な移入および超越論的な移入における対化である。つまり、トイニッセンの解釈によると、エゴの対化は、眼前の対象が身体として統握されたうえで成り立つのである。

また、トイニッセンによると、フッサールが上の移入の根拠と見定めるものは、私の身体と眼前の異他的な身体との類似性である。すなわち、身体としての類似性に動機づけられて、眼前の対象に異他的なエゴが、私のエゴと対になる仕方で移入される。

③ 批判の要点

トイニッセンは、フッサール他者論は独我論に陥っていると、批判している（cf. 151–155）。というのも、トイニッセンによるとフッサール他者論では、他者はあくまで私によって構成されたものとして説明されており、そうした他者を私と等根源的なものと見做すことはできないからである。このことは、トイニッセンの解釈に照らせば、先述の五つの段階における第一段階、身体の類比的統覚において、次のように見てとれる。トイニッセンによると、フッサールはその統覚に、物体の対化が具える「相互性」を適用している（cf. 62–65）。ここでの相互性とは、対化において「対象的意味を相互に重ね合わせ覆い合うこと」（Hua I, 142）として現れる相互性を指す（cf. 62）。こうした相互性が身体の類比的統覚において成り立つならば、統覚された身体は私の身体と等根源的であろう。しかし、ト

イニッセンによれば、そうした相互性が身体の類比的統覚において成り立つというのは、誤った理解である。というのも、物体の対化は、その統覚を基づけてはいても、あくまで私の物体と眼前の物体との対化であり、眼前の物体を身体として統覚する際には、私の身体性という意味をその眼前の物体に移し入れる「意味の転移の一方性（Einseitigkeit der Sinnesübertragung）」が生じるからである（cf. 62–64）。たしかに、エゴの対化にならば相互性が認められるが、この相互性を身体の類比的統覚へ適用することはできない（cf. 62–63）。というのも、本節②で確認したように、トイニッセンによるとエゴの対化は、身体の類比的統覚に基づいたものだからである。つまり、エゴの対化は身体の類比的統覚を前提しており、エゴの対化が生じるときには、身体の類比的統覚はすでにその役目を終えている。

第３節　ベルンハルト・ヴァルデンフェルス『対話の中間領域――エトムント・フッサールに連なる社会哲学的探究』

ヴァルデンフェルスは『対話の中間領域』[3] の中でフッサール他者論を批判しており、この批判は、(A)〈私と同等な他者の不在〉を指摘するものに分類できる。同書の目的は、日常的な対話を中間領域とした、私と他者との対等性を、明示することである（cf. XI–XIII）。そのためにヴァルデンフェルスは、フッサール現象学を用いる（cf. XIII）。ただし、ヴァルデンフェルスがそこから受け継ぐのは、主に現象学の方法であって、フッサール他者論そのものではない（cf. 58–60）。というのも、ヴァルデンフェルスによるとその他者論は、アポリアを抱え込んでいるからである。すなわち、本節で詳しく確認するように、フッサール他者論では他者が私と同等なものとして説明されていないと、ヴァルデンフェルスは批判する。こうした批判が同書の主に第一章で展開されており、ヴァルデンフェルスによればそこで、フッサール他者論はいわばその内側から打ち破られるのである（cf. 63）。

① 原初的領分の解釈

ヴァルデンフェルスによると、フッサールの呈示した原初的領分とは、世界からあらゆる他性が抽象的に取り除かれた、私固有の領分である（cf. 33, 128）。より詳しく言えば、ヴァルデンフェルスはそれに関するフッサールの議論について、次のように解釈している。フッサールは、他者が現実に経験されるとともに、日常的で素朴な世界が私と他者とに共通したものとして経験されていると認めたうえで（cf. 4–5, 13–14）、そこで経験される他者性（Fremdheit）をエポケーする（cf. 19, 33）。これによってその世界から、私固有の自然と身体が見出される領分が抽象的に浮き彫りにされ、これが原初的領分と呼ばれる。また、上のエポケーに伴って、自我が孤独化（*Vereinsamung*）される（cf. 19）。すなわち、あらゆる他性がエポケーされることで、自我は、「他者の中の一人」という意味での「一人の自我」ではなく、ただ曖昧な多義性において「自我」と呼ばれる孤独な自我として、際立てられ

[3] 本節に限り、同書からの引用箇所および参照箇所の指示は、頁数を括弧内に示し、文中に記す。

ることになる。そして、フッサールは原初的領分を、私と他者とに共通する客観的世界の単なる一断片ではなく、その基礎的な層に位置づける。つまり、フッサールは、世界の客観性を私固有な領分から説明しようとする。このようにヴァルデンフェルスは解釈している。

② 移入理論の再構成

ヴァルデンフェルスは、フッサールの呈示した移入理論を、世界経験と自己経験という二重の基盤の上で他者経験を説明したものだと見做して（cf. 31, 45, 66）、再構成している。この再構成は、次のように粗描できる。フッサールの移入理論は、私が世界を経験する中で他者が私の身体と類似した物体として現われることを、足掛かりとしている（cf. 21–22, 45）。とはいえ、そうした世界経験からだけでは、その物体が他のエゴを具えたものとして経験されることを説明できない（cf. 31）。というのも、エゴは原本的に、反省という自己経験においてのみ現れるからである。ただし、この原本的なエゴは、他のエゴではない。したがって、私と同様なエゴを具えたものとして他者を経験するためには、世界経験と自己経験の両方が必要である。そして、これらの媒介点に据えられるのが、私の身体性である（cf. 28, 56, 337–338）。すなわち、世界経験において私の身体と類似した物体が現れるならば、私の身体がエゴをもつことに基づいて、その物体も私と同様なエゴを具えたものとして経験される。このようにヴァルデンフェルスは、フッサールの移入理論を再構成している。

上の再構成においてヴァルデンフェルスは、対象に移入されるものを「私」だと理解している（cf. 268–270）。すなわち、次のように理解されている。他者経験において私は、私の身体と類似した物体へと、その類似性に基づきながら仮想的に自分を置き入れ、いわば、他者の中で共に生きる。こうすることで私は、他者の感情や思考を了解する。もちろん、ここで了解される感情や思考は、あくまで移入における準現在化、仮想的な操作によって捉えられた、他者の感情や思考であって、私自身の感情や思考とは区別される。このようにヴァルデンフェルスは理解しているのである。

また、ヴァルデンフェルスによるとフッサールは、移入における意識が他者を志向的対象とする中で働いていると、見做している（cf. 45）。このことをヴァルデンフェルスは、移入理論の出発点に着目して指摘している。先述のように、ヴァルデンフェルスによるとフッサールは、私の身体と類似した物体が世界に現れることを足掛かりに、他者経験を説明する。このように世界経験が足掛かりとなっている点で、他者が私と対峙した仕方で志向的対象になっていることが前提されていると、ヴァルデンフェルスは指摘するのである。

ヴァルデンフェルスによれば、このように他者経験に志向的図式が持ち込まれる背景には、フッサールの掲げる徹底主義がある（cf. 49–51）。ヴァルデンフェルスは次のように解釈している。その徹底主義とは、認識の正当性について絶対的確実性が保証できるものを追求する徹底的な動機であり、これに従ってフッサールは、私の意識という絶対者を据え、この私に、世界のあらゆるものごとに対する優位性を認める。すなわち、どんなものごとも、私の意識における志向的対象としてのみ証示されう

ると、見定められる。したがって、他者も、志向性の図式において説明されることになる。このようにヴァルデンフェルスは解釈している。

ヴァルデンフェルスによるとフッサールは、移入における意識は「私固有の身体物体に類似した、世界的な物体」を根拠にして働くと、見定めている（cf. 21–22, 45）。つまり、そのように類似した物体が、眼前の対象に私を移し入れることを動機づけるのである。

③ 批判の要点

ヴァルデンフェルスは、フッサールの移入理論は独我論に陥っていると、批判している（cf. 27–30）。というのも、ヴァルデンフェルスによれば、本節②で確認したように、その理論においてフッサールは、志向的対象に対する自我の優位性を認めたうえで、他者を志向的対象として説明しているからである。すなわち、他者が志向的対象と見做されるかぎり、私と他者とは同格ではなく、他者に対する私の優位性が保持され、他者は私に従属してしまうと、ヴァルデンフェルスは指摘する。フッサールの移入理論がそのようなアポリアを抱えていることを、ヴァルデンフェルスは比喩的に次のように表現している。「神が神々を創造しようとするようなもので、神であれば神の被造物ではなく、神の被造物であれば神ではない」（29）、と。ヴァルデンフェルスによれば、フッサールの他者論は結局のところ、そうしたアポリアを抱えたまま、他者の存在論的身分を明確にしていないのである（cf. 21）。

ヴァルデンフェルスによると、上の独我論を克服するためには、私がいるという「原事実」に他者も同様に根源的な仕方で関わっているということが、証明されねばならない（cf. 28, 55）。つまり、「『私の』世界、『私の』身体、『私の』自我は、最初からそれ以上のもの」として異他的な介入にさらされており、私固有の原初的領分は「考えられないもの」、「世界からの触発を誤解する限りで保持されうるもの」として否定されねばならないと、ヴァルデンフェルスは見定めている（cf. 128）。

第４節　クラウス・ヘルト「相互主観性の問題と現象学的超越論哲学の理念」

ヘルトは「相互主観性の問題と現象学的超越論哲学の理念」[4] の中でフッサール他者論を批判しており、この批判は、(B)〈現実的な他者の不成立〉を指摘するものに分類できる。同論文の目的は、「フッサール自身が間主観性の問いを正しく設定しそれに答えを出したかどうかということだけでなく、フッサールによって開かれたたぐいの超越論的哲学が、はたして原則的にそのようなことをなしうるのかどうか」を吟味することである（cf. 3/166）。ヘルトによれば、間主観性の問いとは、私とともに機能している他者がどのように構成されるのかを問うことを指し（cf. 29/172）、また、フッサールにおける超越論的哲学とは、ものごとが意識から独立に「それ自体」あるいは「客観的に」存在すると

[4] 本項に限り、同書からの引用箇所および参照箇所の指示は、原著の頁数、邦訳の頁数の順にスラッシュで区切って括弧内に示し、文中に記す。

いう意味での超越について、それがどうやって確信されるのかを説明しようとする学問を指す（cf. 4）。ヘルトは、そうした超越論的哲学において、他者の構成が解明されうるかどうかを吟味する。そして、こうした吟味の中でヘルトは、フッサール他者論には現象学的に不合理な議論が含まれていると、批判するのである（cf. 3/166）。

① 原初的領分の解釈

ヘルトは1930年のフッサールの草稿を引きながら、原初的領分を、「私が自分のもつ現前として実現しうる」（Hua XV, 125）範囲に限定された領分だと、解釈している（cf. 30–31/174）。そうした限定をヘルトは、「他者を経験する付帯現前化の能力を度外視すること」として、すなわち他者の意識を付帯現前化するのを捨象することとして、理解している（cf. 30–31/174）。というのも、ヘルトによると、他者経験において付帯現前化されている他者の意識は、私のもつ現前として実現することが不可能だからである（cf. 29, 31/172, 174）。つまり、眼前の対象を他者として経験する際、その対象が単なる物体ではなく意識をもっていると捉えられてはいても、その他者の意識は、そこで現前しているものと共に付帯的に捉えられているだけであり、現前へともたらされることはできないのである。なお、ヘルトは、原初的領分が見出されうることについて、特に異論を唱えてはいない。

フッサールと同様にヘルトも、原初的領分においてのみ身体物体性が知られうると、認めている（cf. 32/175）。すなわち、身体物体性は私固有のものとしてのみ知られうると、見做されている。ヘルトによれば、この身体物体性とは、「私自身の物体性と私の身体性」との「統一性」を意味する（cf. 31–32, 34/175, 177）。つまり、原初的な自己の空間的な在り方は、「二重の実在」として、すなわち、内的には主観がそのうちで機能している身体として、外的には空間を充たす物体として、統一的に意識されている。ヘルトによるとフッサールは、この身体物体性を次のような二重の意味によって、さらに浮き彫りにしている（cf. 32–33/176–177）。一つは、「絶対的なここ」という意味である。つまり、私がどこに移動しようとも、私の身体が「ここ」という基準点として意識される。もう一つは、物体として占める任意の「そこ」という意味である。つまり、物体としての私の身体は、私の周囲世界の他の物体と同等な「そこ」を占めるものとしても、意識される。このような二重の意味を、私の周囲世界において原初的に現れ出る単なる物体はもっていない。

② 移入理論の再構成

ヘルトは、フッサールの移入理論を四つの段階に分けている（cf. 33–34/177–178）。

（a）私は、そこにある物体を知覚し、それを私固有の物体と同種のものとして把握する

（b）私は、私固有の物体性と私固有の身体性とが同一であるという統一性を把握する

（c）私は、この統一性を（a）に基づいてそこの物体に移し入れ、「あたかも私がそこにいるかの

ように」という付帯現前化する意識をもつ

（d）この付帯現前化する意識が、そこの物体を他者として統覚することを動機づける

ヘルトによるとフッサールは、これら四つの段階において、他者が原初的な経験にもとづいた仕方で構成されると見定めている。

上の再構成においてヘルトは、「絶対的ここでもあるようなそこ」という二重の意味が対象に移入されると、理解している（cf. 31–34/175–177）。本節①で確認したように、ヘルトの解釈によれば、原初的領分において経験される眼前の対象は、単にそこにある物体として現前しており、私と同様に「絶対的なここ」において機能する他者として構成されていない。それゆえ、眼前の対象が他者として構成されるためには、その対象に上の二重の意味が移入されねばならないと、ヘルトは見做している。

また、ヘルトによればフッサールは、移入において「あたかも私がそこにいるかのように（wie wenn ich dort wäre）」（Hua I, 148）という付帯現前化の意識が成り立っていると、見做している（cf. 32–34/176–178）。この付帯現前化の意識は、簡潔に言えば、私が自分の身を「匿名的な遂行者」、任意の誰かとして眼前の対象におき入れ、その誰かとして世界がどのように経験されるのかについて、準現在化することである（cf. 26–28/168–171）。

ヘルトは、上述の意識が二つの異なったレベルの準現在化作用を相補的に合成したものだと、指摘している（cf. 34–38/178–183）。一つは、疑似的に定立する準現在化作用、すなわち想像である。これによって私は、今まさに「あたかも私がそこにいるかのように（als ob ich dort wäre）」、眼前の対象に私の身体物体性を疑似的に置き入れ、そこにおいて働いている意識を虚構的に表象する。もう一つは、現実的に可能だと定立する準現在化作用である。これによって私は、以前または以後に「私がそこにいるとき（wenn ich dort bin）」、そのそこを私のここが占めるようになることを現実的に表象する。前者の作用は、私の現在の意識機能と他者の現在の意識機能との同時性を表象にもたらし、後者の作用は、私の絶対的なここと他者の絶対的なここととの相違性を時間的差異に基づいて表象にもたらす。このように同時性と相違性とが相補的に表象にもたらされることが、他者が構成されるためには必要である。というのも、他者とは、私と同時に、私のいるここととは違ったそこで働くものだからである。

ヘルトによるとフッサールは、上述の移入は対化を根拠にしていると、見定めている（cf. 33–34/177）。ヘルトはこの対化を、「私がそこにある物体を知覚し、それを私自身の物体と同種類のものとして把握する」という意識の働きだと、理解している（cf. 33/177）。つまり、眼前の対象が私の身体物体と類似していると把握されることに基づいて、その対象に私の身体物体性が移し入れられるのである。

③ 批判の要点

先述の四つの段階に照らして言えば、ヘルトは、（d）の段階に批判の矛先を向ける。ヘルトによると、

この段階で原初性を超え出ていく「決定的な一歩」が踏み出されるが、それは現象学的に妥当な一歩ではないのである（cf. 34/178）。この批判は、以下のように展開されている。

ヘルトによればフッサールは、「あたかも私がそこにいるかのように」という付帯現前化において予期されたことが、眼前の対象に関する経験の進行と合致することで確かめられうると、論じている（cf. 39–40/184–185）。ヘルトは、その予期が、その付帯現前化の具える二つのレベルの準現在化に応じて、二つの仕方で規定されていると、解釈している（cf. 39/184–185）。一つは、疑似定立的な仕方である。つまり、眼前の対象に私を疑似的に置き入れる想像において、その対象がどのように運動をするのかが、予期される。ヘルトによると、例えば、眼前の樹木に私を置き入れて、それの枝を私の腕であると想像した際、それの枝の動きが私の腕の動きとしてどのように運動するのかが、予期される。もう一つは、可能定立的な仕方である。つまり、私の身体性と私の周囲世界の今ある状況とに具わる現実的な制約に基づいて、眼前の対象がどのように運動しうるのかが、予期される。ヘルトによると、例えば、私がそこに行くと、私の左手はまったく動かせないだろうというように、予期される。ヘルトは、これらの仕方で予期されたことが、眼前の対象についての知覚経験の進行に伴って確証されうるということ自体に、反対してはいない。

さらに、ヘルトによるとフッサールは、上述の確証が成り立っているならば、他者が現実のものとして定立されると、見定めている（cf. 40/185–186）。すなわち、ヘルトの解釈によれば、フッサールは次のように論じている。他者の意識機能が原初的な経験において直接現れ出ていなくとも、上述の確証に動機づけられることで、原初性がいわば踏み越えられ、他者の身体物体が現実のものとして認められる、と。ヘルトは、こうしたフッサールの見解の典拠として、『間主観性の現象学』のいくつかの箇所を挙げている（cf. 40–41/186, 213–215; Hua XIV, 500–502; Hua XV, 642）。

しかし、ヘルトは、上述の確証が成り立っていても、他者が現実のものとして定立されることにはならないと、批判する（cf. 41–43/186–189）。ヘルトによれば、そこで定立されうるのは、あくまで私によって想像された、自我の疑似的な変様態にとどまる。つまり、経験の進行が予期されていたこととどれだけ合致しようとも、移入に基づく表象から「あたかも私がそこにいるかのように」という虚構的な性格を取り除くことはできず、その表象に現実的という性格を付与することはできない。それゆえ、移入理論では結局のところ、「私の自我の疑似二重化」（42/187）が示されただけで、現実的な他者定立が説明されたわけではないと、ヘルトは見做すのである。

第５節　斎藤慶典『思考の臨界――超越論的現象学の徹底』

斎藤は『思考の臨界』[5] の中でフッサール他者論を批判しており、この批判は、（B）〈現実的な他者の不成立〉を指摘するものに分類できる。同書の目的は、「E・フッサールの超越論的現象学の企てを、

[5]　本節に限り、同書からの引用箇所および参照箇所の指示は、頁数を括弧内に示し、文中に記す。

（場合によっては彼以上に）徹底的に、かつ厳密に展開することを通じて」、「超越論的なるもの」という「問題領野」が開けてくることを見届けることにある（cf. i–ii, 1–2）。斎藤によれば、「超越論的」とは、意識を超えながらも意識によって目指される超越的対象が構成される様について、明らかにしようとする態度を指す（cf. 5–6）。別言すれば、「私たちの認識をその究極の権利源泉にまで立ち戻って基礎付け直し、その妥当性を明らかにしようとする動機」（245）である。斎藤は、こうした態度において上の超越論的なるものという問題領野への通路が拓かれると、見定める（cf. 2–6）。より具体的に言えば、その問題領野は、「時間」、「存在」、「他者」という問題系それぞれにおいて見出される（cf. i）。斎藤はそのうちの他者を取り上げるにあたって、フッサール他者論を吟味する。この中で、フッサール他者論には錯覚や失敗があると、批判されるのである。

① 原初的領分の解釈

斎藤は、原初的領分について、明示的に取り上げていない。このことは、超越論的領野に関する斎藤の見解と、無関係ではないだろう。斎藤によれば、超越論的領野とは、他者や私を含むありとあらゆるものごとが現象へともたらされる場であり、認識の絶対的源泉として、すべてにして唯一のものである（cf. 20–27, 245–247, 250）。斎藤は、こうした領野が他者や私に属する意識領分ではないことを強調している。すなわち、斎藤によれば、超越論的領野は、他者や私自身すらも現れてくる場であって、匿名的なものである。斎藤は、このような領野こそ、フッサールが超越論的動機に促されて獲得したはずのものだと、見定める（cf. 245–246, 250）。そのうえで斎藤は、フッサールが超越論的領野に関して「自己誤解」に陥っていると、指摘する（cf. 246–248）。すなわち、斎藤によれば、超越論的領野が超越論的主観性ないし超越論的自我と等置されていることからも窺えるように、フッサールはそれを私に属するものだと誤解してしまっている。したがって、原初的領分が私固有の超越論的領分だとすれば、斎藤にとってそれは、上の誤解に基づいたものであり、改めて取り上げるまでもないものであろう。

② 移入理論の再構成

斎藤によれば、フッサールの移入理論とは、対化を梃子に、私をそこにある物体へと移入することで、他者が構成されると説明する理論である（cf. 255, 278–279）。このように再構成するにあたって斎藤は、ヘルトの「相互主観性の問題と現象学的超越論哲学の理念」を参照している（cf. 278–279）。この論文での議論については、前節ですでに整理した。したがって、以下の整理では、前節の整理といくつかの点で重なり合う。

上の再構成において斎藤は、対象に移入されるものを、私と私の身体との間に成り立つ関係だと理解している（cf. 279）。斎藤は、この移入されるものがあくまで私に属するものであることを、強調している（cf. 255）。

また、斎藤によればフッサールは、移入において「私がそこにいるときのように」（wie wenn ich dort wäre）という意識が働いていると、論じている（cf. 279）。この意識について斎藤は、次のように理解している。その意識は、二つの定立を示している。一つは、「あたかも私がそこにいるかのように」（als ob ich dort wäre）という疑似定立である。この定立では（その接続法第Ⅱ式の非現実話法が示しているように）、私はあくまでここにおり、そこの物体が私の身体ではないことを前提としたうえで、虚構意識の中で、そこにある物体の中に私を疑似的に置き入れている。もう一つは、「私がそこにいるとき」（wenn ich dort bin あるいは wenn ich dort wäre）という可能的定立である。この定立では（その可能話法が示しているように）、私は実際にそこへ行くことができるという可能性の中で、そこに私のここが想定されている。これら二つの定立を、フッサールは、「私がそこにいるときのように」という曖昧な定式化の中で混合し、そこに、私のここと同じ第二の絶対的ここ、すなわち他者が構成されると論じた。このように斎藤は、移入における意識の働きを理解している。

斎藤によるとフッサールは、上述の移入は対化を根拠にしていると、見定めている（cf. 255, 279）。斎藤はこの対化を、知覚において私の身体と他者の身体とが同種のものとして受動的に結合されることだと、解釈している。その上で斎藤は、そうした対化において身体間の類比が生じ、この類比に基づいて移入が成り立つと、理解しているのである。

③ 批判の要点

斎藤は、フッサール他者論について、二つの批判を呈示している。

一つ目は、他者を他の超越論的主観性として語りうる、あるいは語らねばならないと、フッサールは錯覚しているという批判である（cf. 248–251）。この批判は、次のように展開されている。フッサールは、私と他者とがそれぞれ超越論的主観性として共在していると、想定している。というのも、フッサールによると、もし、私のみが超越論的主観性として存在し、こうした私によってのみ世界が構成されるとすれば、独我論に陥り、そしてまた、世界が誰にとっても同一の世界として現われているという客観性の構成についても、うまく理解できないからである。しかし、そうした想定は、超越論的主観性の規定と矛盾する。すなわち、フッサールは超越論的主観性を、認識の絶対的源泉として、一つ、二つと数えることすらできない唯一のものだと見定めたのであり（本節①参照）、これと同様の身分をもつ他の超越論的主観性を想定することはできないはずである。それにもかかわらず、フッサールは他者を、他の超越論的主観性と見做してしまった。このようにフッサールは錯覚していると、斎藤は批判するのである。

斎藤によると、こうした錯覚の要因は、フッサールが超越論的領野を私に属するものと見做したところにある（cf. 251）。本節①で確認したように、斎藤はフッサールのそうした見解を、誤解にほかならないと見定める。斎藤によれば、こうした誤解によってフッサールは、次のように前提ないし要請してしまう。すなわち、私が超越論的主観性として存在するならば、当然、他者も他の超越論的主観

性として存在しているのでなければならない、と。このようにしてフッサールは先の錯覚に陥ったと、斎藤は指摘するのである。

二つ目は、フッサールの移入理論では他者が私の変様態としてしか説明されていない、という批判である（cf. 255, 278–280）。この批判は、ヘルトの議論を参照しつつ、次のように展開されている。フッサールは、疑似定立と可能定立とを混同して定式化された意識において、眼前の対象が他者として構成されると、説明する（本節②参照）。しかし、疑似定立的な意識は、眼前の対象に私を虚構的に置き入れるように働き、可能定立的な意識は、眼前の対象が占めるそこへ私が行ったと想定するように働くのであり、どちらの意識においても他者は現われえない。すなわち、移入理論において説明された他者は、眼前の対象へと虚構的に置き入れられた私、あるいは、眼前の対象が占めるそこへ実際に行ったと想定された私、これらのいずれかでしかなく、いずれの場合も、そこに構成されているのは他者ではなく、変様された私にほかならない。このようにフッサールの移入理論は失敗したと、斎藤は見做すのである。

斎藤によると、こうした失敗の要因は、フッサールが他者についての原本的な意識を主題的・定立的意識だと信じていたことにある（cf. 280）。斎藤は、他者構成を解明するためには、他者についての非主題的・定立的意識が俎上に載せられるべきだと、指摘する。この非主題的・定立的意識とは、「世界についての意識にすでに他者が共同主観（Mitsubjekt）として、主題となることなく居合わせていることの意識」（280）を指す。斎藤によれば、こうした意識が、他者についての原本的な意識として、他者についての主題的・定立的意識を基づけている。というのも、世界についての意識はもともと、私が他者たちと別のパースペクティヴから関わっているということをはじめから含みこんで成り立っているからである（cf. 252, 280–281）。つまり、世界についての意識は、それを意識している私がいつもすでに非主題的に居合わせていると同時に、この非主題的な私と同じ次元で他者も居合わせていることについても、意識しているのである。

第６節　榊原哲也『フッサール現象学の生成――方法の成立と展開』

榊原は『フッサール現象学の生成』[6] の中でフッサール他者論を批判しており、この批判は、(C)〈分析の不徹底〉を指摘するものに分類できる。同書の目的は、「フッサール現象学の方法の意味と射程、そしてその現代的意味を見定めること」（2）にある。そのために、榊原は、現象学の方法がどのように展開していくかを、フッサールのテクストに基づいて丹念に追跡していく。この中で榊原は、フッサール現象学における分析の方法として「静態的分析」と「発生的分析」を取り上げ、それぞれ次のように解釈している。静態的分析とは、すでに構成され出来上がった現象に基づいて、そこで成り立っている階層的な意味の基づけ関係を明らかにする方法である（cf. 313, 326）。例えば、すでに構成され

[6] 本節に限り、同書からの引用箇所および参照箇所の指示は、頁数を括弧内に示し、文中に記す。

出来上がった「客観的世界」という現象について静態的に分析すれば、その客観性という意味、すなわち誰にとってもそこにあるという意味は、他者たちという意味の層に基づけられて成り立っていることが、明らかにされる（cf. 323）。これに対して発生的分析とは、静態的な基づけ関係を最下層まで遡り、この最下層の意味が初めて構成される場面、すなわち意味の原創設を、明らかにしようとする分析であり（cf. 312, 327, 333–334）、こうした分析においては、その下層が上層に対して時間的に先なるものと見做される。例えば、他者という意味について発生的に分析する場合、他者という意味を基づける他のエゴへ、そしてこれを基づける私のエゴへと遡り、この私のエゴという意味がどのように原創設されるのかが、明らかにされねばならない（cf. 323–325, 332）。榊原によれば、フッサールは1910年代半ば頃に静態的分析から発生的分析への歩みを進み始め、そして1920年代初め頃から、発生的分析によって種々の構成における根拠を明確にしようとした（cf. 311–319）。榊原は、フッサールのそうした歩みを具体的に確認するために、「第五省察」（1929年）をテクストとして用い（cf. 319）、そして、そこで展開される分析の方法を検討する中で、その分析の不十分さに批判の矛先を向けるのである。

① 原初的領分の解釈

榊原によると、フッサールの呈示した原初的領分とは、「誰にとっても」という意味を失った、私に固有な自然、単なる物体の世界である（cf. 324–327）。より詳しく言えば、榊原は原初的領分に関して、次のように解釈している。原初的領分は、他者に向かう一切の志向性をエポケーすることで開示される。すなわち、他者という意味が私固有のものによって静態的に基づけられていると見做したうえで、上層の他者に関わる志向性を捨象することによって、下層の私固有のものが、その上層を基づける原初的領分として、際立てられる。こうした領分は、単なる物体の世界ではあるが、そこでは単なる物体のほかに、私の身体だけがまさに身体であるような物体として見出される。このように榊原は解釈している。

② 移入理論の再構成

榊原は移入理論を、「他の身体」の構成に関する議論、そして「他のエゴ」の構成に関する議論、これら二段階に大きく分けて、再構成している。榊原によれば、前者の議論では、次のことが示される。すなわち、眼前に私の身体と類似した物体が現れると対化が生じ、私の身体からそこにあるその物体へと身体という意味が受動的に移入され、これよって、その物体が他の身体として構成される、と（cf. 328）。また、後者の議論では、次のことが示される。すなわち、そこにある物体が他の身体として構成されると、これに動機づけられて、私とは異なる他のエゴがそこの身体に付帯的に現前し、そして、こうした他のエゴが私と同様に一つの原初的世界をもったものとして統覚されることで、他者が構成される、と（cf. 328–329）。以上のように、榊原によれば、移入理論においてフッサールは、原初的領

分に現れる或る対象が私とは異なる他の身体として統覚されるならば、そこに私とは異なる他のエゴが付帯的に現前すると、論じたのである（cf. 321）。

上の再構成において榊原は、私の身体という意味が対象に移入されると理解している（cf. 328）。本節①で触れたように、榊原によるとフッサールは、私の身体という意味が原初的領分において根源的に構成されると見定める。榊原は、こうした意味としての身体こそ、移入されるものだと理解しているのであり、私の感情や私の心的内容が移入されるとは理解していない。

また、榊原は、移入における意識の働きとして、「連合的対化」（Hua I, 147）ないし「対化的連合」（Hua I, 148）を浮き彫りにしている（cf. 318, 328–329, 332）。榊原によれば、フッサールにおける連合とは、時間的な前後関係にある二つのものごとを綜合的に捉える意識の受動的な働きとして、「受動的発生の原理」（Hua I, 113）に据えられるものである。榊原は、こうした連合の中でも上の対化的連合について、次のように理解している。原初的領分において私の身体が根源的に構成されたうえで、眼前に私の身体と類似した物体が現れるならば、そこにあるその物体はここにある私の身体と相容れないながらも、その物体には私の身体と同様な身体という意味が受動的に移し入れられる。この際、そこにある他の身体に付帯して現前する他のエゴが、私のエゴと根源的に対となって与えられる。こうした働きが対化的連合である。このように榊原は理解している。

榊原は、上述の移入が何を根拠として働くのかについて、明示的に取り上げてはいない。これは、「第五省察」での他者論に対する榊原の批判と無関係ではないだろう。次の項目で詳しく確認するように、榊原によれば、「第五省察」での他者論では発生的分析が十分に展開されていない。そうであれば、そこでは移入の根拠が発生的分析の観点から十分に明確にされていないはずであり、それを明示するのはそもそも難しいことであろう。

③ 批判の要点

榊原は、「第五省察」での他者論には、種々の発生的分析が不十分なままに入り込んでしまっていると、批判している（cf. 319, 453）。この批判は、以下のように展開されている。

榊原によれば、フッサール自身は「第五省察」での他者論を、静態的分析によるものと位置づけている（cf. 319, 321）。榊原は、この位置づけを、条件付きで認めている（cf. 323, 333）。すなわち、すでに構成され出来上がった他者という意味を手引きとし、そこで成り立っている意味の静態的な基づけの構造を分析している限り、榊原はその分析を静態的だと認める。

しかし、榊原によれば、「第五省察」における実際の分析には、次の三点において、発生的分析の要素が不十分なまま入り込んでいる。

一つ目は、原初的領分へと還元する手続きである（cf. 324–327）。本節①で確認したように、榊原によればフッサールは、他者という意味が私固有のものによって静態的に基づけられていると見做し、上層の他者に関わる志向性を捨象することによって、その下層にある私固有のものを原初的領分とし

て際立てる。榊原は、このように原初的領分へと還元する手続きを、フッサールが1921年の草稿で呈示した「解体（Abbau）」という方法にあたると、指摘する。榊原の解釈によると、その解体とは、静態的な基づけ関係を手引きとして、そこでの上層を捨象してもそれの下層が成り立つかどうかを吟味し、成り立つ場合にはこの下層をその上層に対して時間的に先行して発生すると位置づける作業を指す（cf. 315）。このように解体において、静態的な基づけ関係が時間的な前後関係、すなわち発生の関係として捉え直されることから、榊原は解体を発生的分析の端緒と見定める（cf. 315）。榊原は、原初的領分への還元においても他者という上層が捨象され、その下層として原初的領分が際立てられていることから、そこでは解体が行われており、発生的分析への一歩が踏み出されていると、見做すのである。ただし、その発生的分析は一歩目以上に進められておらず、不十分なものとなっていると、榊原は指摘する。というのも、榊原によると、発生的分析をさらに進めるためには、原初的領分そのものに関する原創設が遡行的に問われるべきであるが、そこまで立ち入って分析されていないからである。

二つ目は、他の身体の構成に関する分析である（cf. 329–331）。本節②で確認したように、榊原によればフッサールは、他の身体の構成を、受動的発生の原理である対化的連合によって説明している。これを踏まえて榊原は、その構成に関する分析が半ば発生的分析になっていると、指摘する。つまり、榊原によるとその分析は、私の身体がすでに構成されていることを前提したうえで、時間的にその構成の後にどうやって他の身体という意味が発生するのかについて、解明しようとするものとなっている。ただし、その分析は発生的分析として不十分だと、榊原は指摘する。というのも、榊原によると、他の身体という意味がどのように発生するのかを十分に解明するには、前提されている私の身体という意味まで遡り、これの原創設が明確にされねばならないからである。

三つ目は、他のエゴの構成に関する分析である（cf. 332）。本項②で確認したように、榊原によればフッサールは、他のエゴの構成を、付帯現前化と対化的連合によって説明している。これを踏まえて榊原は、その構成に関する分析にも先述と同様な批判が適用されうると見做し、次のように論じている。フッサールは、私のエゴがすでに構成されていることを前提したうえで、どうやって他のエゴという意味が発生するのかを分析している。しかし、この発生的分析は、前提されている私のエゴという意味まで遡り、これの原創設が明確にされていない点で、不十分である。このように榊原は批判するのである。

第７節　先行研究の批判に関する比較検討

本論では、フッサール他者論に対する先行研究の批判を、（A）〈私と同等な他者の不在〉を指摘するもの、（B）〈現実的な他者の不成立〉を指摘するもの、（C）〈分析の不徹底〉を指摘するもの、これら三つに大別して整理した。本節では、これまでの整理を踏まえて、それら三つの批判の特徴を簡潔に示す。

（A）〈私と同等な他者の不在〉を指摘する批判では、他者に対する自我の優位性が批判の要点となっていた。すなわち、自我には移入するものとして他者に対する優位性が認められるため、移入において構成される他者は私と同格的なものではないと、論じられる。そうした優位性は、移入における意識の志向性や対化に着目して呈示されていた。このような批判を展開した論者が、トイニッセンやヴァルデンフェルスであった。

（B）〈現実的な他者の不成立〉を指摘する批判では、自我の疑似二重化が批判の要点となっていた。すなわち、移入において構成される他者は自我の疑似的な変様態でしかなく、そこでは現実的な他者が構成されないと、論じられる。そうした自我の疑似二重化は、移入における意識が準現在化作用であることに着目して呈示されていた。このような批判を展開した論者が、ヘルトや斎藤であった。なお、本論第5節③で確認したように、斎藤は、フッサールは他者を他の超越論的主観性だと誤解しているという批判も、呈示している。この批判は、フッサール他者論と無関係ではないにしても、フッサール他者論自体を批判するものというよりむしろ、超越論的領野に関するフッサールの理解を批判するものに位置づけられよう。

（C）〈分析の不徹底〉を指摘する批判では、発生的分析の不十分さが批判の要点となっていた。すなわち、フッサールの分析は、他者という意味構造の静態的分析にとどまっており、他者という意味がどのように発生するのかを十分に解明していないと、論じられる。このような批判を展開した論者が、榊原であった。

批判の要点に照らせば以上のように先行研究を分類できるが、フッサール他者論を独我論に陥ったものと見做すか否かに照らして大別することもできる。本論で整理した論者のうちトイニッセン、ヴァルデンフェルス、斎藤は、フッサール他者論に関する不備を批判し、他者を欠くという点で、それを独我論だと見做している。これに対して、本論で整理した論者のうちヘルト、榊原は、フッサール他者論の不備を批判はしても、フッサール他者論が独我論に陥っていると明示的に述べてはいない。このような見解の違いは、移入されるものに関する解釈の違いと無関係ではないだろう。前者の論者たちは、移入されるものをもともと私に固有のものだと解釈している。後者の論者たちは、私の身体に関して成り立つ意味が移入されると解釈している。このようにあくまで意味が移入されるならば、移入における私の固有性は、意味のもつ普遍性によってそれほど明確ではなくなる。つまり、移入されるものがあくまで意味の次元に限定されているならば、フッサールは独我論に陥ってはいないと見做すことができるかもしれない。これに関する議論は、先行研究の整理と比較検討という本論の主な目的からは外れるため、ここでは深く立ち入らず、また別の機会に扱いたい。

おわりに

本論で確認したように、フッサール他者論に対する先行研究の批判は、（A）〈私と同等な他者の不在〉を指摘するもの、（B）〈現実的な他者の不成立〉を指摘するもの、（C）〈分析の不徹底〉を指摘するも

の、これら三つに大別できる。

最後に、今後の課題と展望を簡潔に確認しておく。

その課題は、フッサール他者論を擁護する先行研究について整理し、本論の成果と併せて比較検討することである。フッサール他者論については、これまでにいくつかの擁護も呈示されてきた（cf. Aguirre [1982]、田口 [2010]）。これまでの主な擁護は、本論で大別した三つの批判のいずれかに応答したものとして、分類できる。したがって、フッサール他者論を擁護する議論と併せて考察すれば、本論で整理した先行研究の批判の特徴はより浮き彫りとなり、さらに、フッサール他者論において何が議論の余地として残されているのかが明確になるだろう。

文献

Aguirre, Antonio [1982]: *Die Phänomenologie Husserls im Licht ihrer gegenwärtigen Interpretation und Kritik,* Darmstadt.

Held, Klaus [1972]: "Das Problem Intersubjektivität und die Idee einer phänomenologischen Transzendentalphilosophie." *Perspektiven transzendental-phänomenologischer Forschung* (Phaenomenologica 49), Martinus Nijhoff, 3–60.（坂本満抄訳「相互主観性の問題と現象学的超越論的哲学の理念」、新田義弘・村田純一編『現象学の展望』所収、国文社、1986年。）

Husserl, Edmund: *Husserliana. Edmund Husserl Gesammelte Werke,* Nijhoff/Kluwer/Spinger, 1950ff.（「Hua」と略記し、巻数をローマ数字で、ページ数をアラビア数字で指示する。）

Theunissen, Michael [1977]: *Der Andere. Studien zur Sozialontologie der Gegenwart,* 2. Auflage, Walter de Gruyter.

Waldenfels, Bernhard [1971]: *Das Zwischenreich des Dialogs. Sozialphilosophische Untersuchungen in Anschluss an Edmund Husserl,* Martinus Nijhoff.

斎藤慶典 [2000]：『思考の臨界――超越論的現象学の徹底』、勁草書房。

榊原哲也 [2009]：『フッサール現象学の生成――方法の成立と展開』、東京大学出版会。

鈴木崇志 [2021]：『フッサールの他者論から倫理学へ』、勁草書房。

田口茂 [2010]：『フッサールにおける〈原自我〉の問題――自己の自明な〈近さ〉への問い』、法政大学出版局。

浜渦辰二 [1995]：『フッサール間主観性の現象学』、創文社。